



平成30年1月20日(土)、日本自然保護協会が足立区の帝京科学大学でシンポジウムを開催しました。モニタリング1000里地調査(モニ1000)が10年経過したことを踏まえ、その成果で判明したことや、このような市民による調査の可能性について考える内容でした。その中で私は天覧山での調査について事例発表を行いました。

協会では毎年調査担当者の交流会を開催しています。今回も交流の場となっていて、東京開催のため過去最高の150人もの参加者があり、たくさんの研究者や調査担当者や情報交換ができました。

モニ1000のような広範囲での長期的な市民調査は初めてで、延べ7万人以上が参加し、140万件のデータが収集されました。これまで一部地区での調査結果やデータではない認知として語られてきた動植物の減少といった話が、定量的に語れる時代がきたと言えます。実際に、ノウサギが急激に減少しているなどのデータがあり、これは全国で草地環境がどんどん減少していることが原因と思われます。私が担当しているチョウでも、絶滅した種のほとんどは、以前は普通にあった草原が開発されたり放置されて樹林化したことが原因とされています。

報告の一つ、絶滅危惧種のチョウ・オオルリシジミの僅かに残った地域での増殖の研究から、草原の野焼きがなくなったことで天敵の寄生蜂が増え、そのため増殖に失敗していることが分かりました。

天覧山だけの調査結果では、動植物の増減の原因は残念ながら明確には分かりませんが、膨大な全国データと比較することで分かることが期待されます。今後の谷津田作業などの改善や、ひいては全国の生物多様性の保全に貢献できると思うことで、地道な調査をさらに継続していきたいと思いました。

会員 大石 章

子ども達の笑顔が一番輝く場所



「みんなでおそとであそぶの、とってもたのしいね!」我が家の4歳児が話したその一言が、とても印象深く今でも耳に残っています。『森のようちえん』という自然体験を日々の幼児教育の基本とする保育が、今、日本中で静かなブームとなっています。私がその言葉を初めて耳にしたのは今から8年前。ずっと温めていたものを、2018年4月12日漸く少しだけ形にできました。

この日は親子で総勢17名参加があり、下は10ヶ月の赤ちゃんから上は中学校2年生までの子ども達がほとけじょうの里の新緑のもとでのんびりと一日を過ごしました。初めて顔を合わせる子ども達ばかりでしたが、さすが子ども。仲良くなるのに時間は全くかかりません。オタマジャクシをずっと観察したり、ぬかるみで度胸試しをする子、木にかかっているつるをひたすらひっぱる子。イラストクイズにハマっている子もいたり、各々好きな遊びに夢中になっている子ども達の表情はとっても輝いていて、今日開催して良かったなあとしみじみ思いました。てんたの作業日には多くの野鳥の声が聞こえるのですが、この日ばかりは、子ども達の笑い声や叫ぶ声が里山中に響いていました。

当日のプログラムは、『みんなでピザを作り、自然の中で過ごす』というシンプルなもの。子ども達同様保護者の方も初対面の方が大半でしたが、「ピザを作り食べる」共同作業を行う中で親しくなり、合間合間で子育て相談や、趣味の話などで盛り上がる場も。子どもにモテモテのパパや、子ども以上に童心に返って遊ぶママの姿も見られ、時間を忘れて親もリフレッシュできる、そんなひとときを過ごせました。

ピザ作りは子どもと大人の合作。日常でお手伝いをする事が無い子どもピザ生地を伸ばし、ソースを塗り、トッピングする作業に没頭。ついにつまみ食いをする子どももちろんいます!そんなピザ、もちろん美味しくできました!多めに作ったつもりが、子ども達の食欲を甘くみていました……。ピザが焼き上がりカットした側からどんどん無くなる恐怖(笑)。自然の中で食べるってなんて楽しいの!「美味しくて止まらないよ〜」なんて声もあり、みんなで大騒ぎしながらのランチタイムでした。

特別な遊具が無くても、一日楽しめる自然の中。普段の生活で見落としがちなお子さまへの眼差しを体感してみませんか?自然の中で子どもと過ごす気持ちよさ、ヤミツキになりますよ〜!

会員 長谷川しのぶ



みんなで楽しくピザづくり



多峯主山山頂の経塚

最初の開発計画は市民の篤い保全運動によって中断し、忘れられた頃に再び持ち上がり「天覧山・多峯主山の自然を守る会」ができた。この活動は途切れることなく里山の自然と市民の様々な付き合い方を生み出して、今に至っている。そんな中で事業者による将来を見誤った開発計画と、それに丸投げと思える当時の行政の非が時と共に明らかになり、中止せざるを得なくなってきた。私達はこの経験によって里山やその自然は、この大地の住民である里人によって創られ、守り護られてきたように、これからも心あり、しがらみから自由な市民によって守られてゆくだろうと思っている。移住する大分、竹田でも、もう少し里人らしく生きたいと希っている。

会員 早瀬 成憲

市民が守った里山と自然

九州に引越す事になり、テンテコ舞が続いているが、春爛漫の花の時から、あつという間に山中が若葉燃える季節になって、山里は命溢れて豊かだ。四十一年前、飯能、細田のこの隠れ里に住み始めた。当時、飯能市周辺は住宅団地開発のラッシュで最後にかろうじて残っていた天覧山一帯も団地になってしまおうという事で、「天覧山周辺の自然を守る会」を立ち上げていた。ここに参加したことが、この里山のお付き合いの始まりとなった。この活動の中でこの地を知るにつれて、この周辺が飯能の発祥の地であり、前を流れる名栗川、後ろを天覧山などに守られた日本の典型的な里山であることを教えられた。ここで先人は山、川、畑で衣食住を自給自足し、経済の自立を成していた。里人の心も御嶽山には八幡様をはじめ万の神々をお祀りし、共に愉しみ、これに守られてきた。その奥の院に当たる多峯主山には、古に建っていた宝塔の瓦が発掘されており、現在も経塚の下には法華経等の経文が河原石に一文字ずつしたためられ、埋めてお祀りしてある。これによって往時の里人の素朴でやさしい心の生活が自ずと偲ばれてくるのだ。同じ仏教徒として大切な参詣処となった。

